

タイトル：2025 年度 教育セミナー（第 21 回）

日時：2025 年 9 月 18 日（木）～21 日（日）

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3 階 大会議室（303）

「ムガル帝国第 3 代君主アクバルの王権におけるノウルーズ祝祭の機能」

神野 颯人（明治大学大学院）

この度は「中東☆イスラーム教育セミナー」を実施いただきまして誠にありがとうございました。運営の千葉様、また司会を担当いただきました小倉先生をはじめ、AA 研所員の先生方には 4 日間大変お世話になりました。まずこの場を借りて深く御礼申し上げます。

私が所属するゼミからは今回で 3 回連続の参加となりました。指導教員から勧めを受けた当初は、多様な領域の学生が集うことや、修士論文の執筆が迫る時期であることから、自身の研究にどれだけ資するか測りかねていました。しかしいざ参加してみると、日々の研究活動では得難い刺激に満ちた、徹底的に鍛え上げられる充実の 4 日間となりました。

とりわけ歴史学を専門の領域とする私にとって、地域研究や現代政治研究などの異なる領域の方々が集う環境は、所属している研究室とは全く別種のものでした。これまでに意識を向けてこなかった地域・時代・問題について皆さまの発表から多くを学び、また新たな視点を得ることができた大変刺激的な経験でした。また同年代の大学院生との交流では、領域の異なる方との間では関心の幅を広げ、歴史学を共有する方との間では互いの理解をより深めることができました。今思い返すと、この場での人脈形成や交流こそがこのセミナーの最大の醍醐味であったように思われます。

そして今回のセミナーは、私にとって最初の対外での研究発表の機会でもありました。今回の発表ではムガル帝国のノウルーズ祝祭の実態解明に向けて、これまでの祝祭研究において捨象されてきたイエズス会士書簡の有効性を提示すると共に、書簡中に見いだされる「時期の遵守」について簡単なながら検討を行いました。質疑応答では鋭い質問や手厳しいご指摘を頂戴し準備や経験の不足を痛感させられましたが、その一方で自身の研究の新規性を一定程度示すことができた手応えもありました。さらには、研究対象としての時代・言語を共有する先生からも貴重な助言を頂き、研究の今後の展望や将来の戦略についてもご指導いただくなど、大変有意義な時間を過ごすことができました。

今回のセミナー参加を通じて得た経験は単なる研究発表にとどまらず、残りの大学院での活動、ひいては修了後の在り方にも深い影響を与えるものであったと考えています。残された時間は限られていますが、今回得た教訓や反省点を糧に修士論文の執筆により一層邁進する所存です。最後に、このような貴重な機会を与えてくださった関係各位に改めて深く感謝申し上げます。